

## 青山杉雨の書芸術観 — 『書道研究』〈表紙のことば〉の考察 —

古木 誠彦

九州女子大学人間科学部人間発達学科  
北九州市八幡西区自由ヶ丘二・二(〒807-1858)

(二〇一一年五月三十一日受付、二〇一一年七月十二日 受理)

### 要旨

戦後の日本書道界で、強靱な牽引力でリーダーシップを取り、書の現代性を模索してきた青山杉雨(文化勲章受章)が逝去して十八年が立つ。この間、様々な場面で青山の書芸術観は取沙汰され、近年、作品集の出版や専門誌での特集が組まれている。また、『青山杉雨文集』(全五巻)も編まれ、青山の書に対する態度が明確に理解できるようになってきた。これは、青山の仕事が今まで以上に、現代において将来を示唆している、と周知されたためであろう。

本論は青山自身と日本書道界にとって重要な時事のあつた一九八七〜一九八八年間を中心に、『書道研究』〈表紙のことば〉(美術新聞社出版)を、青山の書芸術観と日本書道界の動向を探る資料として取上げた。

また『書道研究』と『江南遊』は、ほぼ同写真を使い解説が成されており、各月の〈表紙のことば〉と『江南遊』に共通性を窺

えることから、これらを精査して青山の書芸術観の究明を試みた。

具体的には、一九八七年六月から一九八八年八月の〈表紙のことば〉を中心に検証した。一九八九年三月から六月までの四ヶ月間も、青山は〈表紙のことば〉を担当する。ここでは、一九八七年六月から一九八八年八月の〈表紙のことば〉や『江南遊』に対する補足説明がなされている。本論では、その取り扱いについては、一九八七年六月から一九八八年八月中の事項との関連の説明に留めた。一九八九年三月から六月の表題は、以下の通りである。

「太湖の西洞庭山」「長江を下る船団」  
「六朝・蕭景墓の石獸」「晋江の古い街」

〈表紙のことば〉と写真を担当した時期に、青山は大事業を手掛けていた。その事業を行う要因となったものは、青山自身が中国悠久の歴史や書芸術と対峙することで、そこに呼応して見え隠れする日本書道界に対する課題解決を切望したためであろう。

『江南遊』と『明清書道図説』の編纂も、この問題解決の一翼を担っている。

しかし、生前の青山が常に意識し提唱してきた「教養主義か表  
現主義かの相克」、「新教養主義の可能性」、「技術至上主義への  
反省」、「書道教育問題」についての明確な解答は、現在も為さ  
れていない。

よって、現代において書を継承する者は、青山の書芸術活動か  
ら、今後の書の在り方についてもっと多くのことを模索し、青山  
が提示した課題について解答する必要があると考察した。

## 一、はじめに

青山杉雨（本名・文雄）は、一九一二年（明治四五）六月六日、  
愛知県栗栗郡草井村大字村久野に生まれる。一九一六年（大正  
五）、四歳で上京、向島に住むこととなる。

一七歳で私立芝中学校卒業し、翌年、書家で義兄弟のような間  
柄である大池晴嵐に書の手ほどきを受ける。この頃から、青山  
の書に対する飽く無き追求が始まったと言ってもいいだろう。そ  
して、一九三六年（昭和一一）二四歳、当時、書道界において中  
心的な展覧会であった泰東書道院展に初出品する。青山に関する  
大体の書籍において、この時から書歴が始まっている。

書道研究家・西嶋慎一氏製作による青山杉雨作品歴は、当にこ  
こへ基軸を置き、以下のような区分で書歴が展開される<sup>1)</sup>。

- 一九三七年～一九六二年（修作時代）
- 一九六三年～一九六九年（作風の確立時代）

一九七〇年～一九七六年（前代の試行を受け、展開が盛んに  
行われる時代）

一九七七年～一九八二年（第一期黄金時代）

一九八三年～一九八五年（董其昌論による試作・展開時代）

一九八六年～一九八八年（第二期黄金時代）

一九八九年～一九九二年（ある境地を求める時代）

本論で、取上げる月刊誌『書道研究』（美術新聞社）は、一九八  
七年（昭和六二）六月創刊である。この創刊号から、翌年、一九  
八八年八月までの表紙写真の提供と、その〈表紙のことば〉が青  
山の担当となる。先述の区分からすると、『書道研究』表紙の担  
当をした時期は、当に青山の第二期黄金時代の最中である。この  
時期は、日本書道界をリードする立場が前時代と比べより一層強  
くなる。それに呼応して作品も装飾性が少なくなり、直接的表現  
が多くなる時期である。

書における表現（書作）と理論を繋げる目的で編集された、  
『書道研究』に、青山が先頭を切つて投稿することは、大いに意  
義のあることであつたに違いない。しかも、凝り性の青山が撮影  
した写真をそのまま表紙に使用することは、何らかのメッセー  
ジ性を有すると推察する。そのコメントに注目し、〈表紙のことば〉  
の奥にある真意と、青山書学と書道史観をより明確にする試みが、  
この小論の目的である。

## 二、『書道研究』〈表紙のことば〉に関わる意義

青山にとって、『書道研究』に関わる意義は、前述のように、作品制作と書論や時代研究との結びつきがより明確になされていなかった書道界において、より深い書の理論追求を促す意味もあった。「書道美術新聞'86迎春特別インタビュー」（一九八六年一月一日）に掲載された青山の発言、「伝統、現代両派関係見直そう」<sup>②</sup>がその事実を明確に指摘する。

「…伝統派の作家たちの多くが、明清、明清といいながら、全然その根源的なものを見きわめようとせず、思想的な掘り下げもしようとせずに、ただ明清の先人の書いたものを手本にしているだけであることは、まことに遺憾な現実というほかはありません。」

よって、青山が『書道研究』に関わった理由は、時代における強靱なりーダーシップを発揮していた立場にも因る。と同時に、師西川寧より確固たる書道史観と書字に対する姿勢を享受され、さらに青山本人が作品制作と書論理解によって得た中国各時代の技法と理論、時代性の融合を試案しながら、身を持って理論の必要性を感じていたからであろう。

第二期黄金時代（『書道研究』に関わる期間がそれに当たる）の前時代、青山は董其昌の書作に大変刺激を受ける。ただ書論の通読による刺激ではない。台北故宮博物院において董其昌作品と対峙し、董其昌論の実証研究を行っている（六三歳時）。そして、

単に董其昌論を自らの中へ確実に定着させただけではない。その論を持って、日中問わず自身より先達の書家の書に対する考えでも、比較検討を行った感がある。

青山が過去を振り返った一文に、師西川寧を講師とする書談会（一九四六年一月～一九四七年一月・計一二回。青山三四歳）<sup>③</sup>のことがある。この書談会が、青山書学書道史観の礎となり青山芸術を支えている。

「…今にしていえば、先生もわれわれも、いわば「書道復興」に学問的な面から手をつけていくのだという意気込みの勉強会であった。…（中略）…実のところ、あの時の勉強がわれわれをどれほど激励し、また裨益したかは、はかり知れないものがあつた。」

この書談会（「第二回明末書道に於けるロマンチズム運動」一九四七年一月十九日・築地本願寺）に参加し、董其昌論とその中で展開される董其昌の文人主義への主張に、青山は初めて触れることとなる。他に、西川寧の董其昌に関する論に、『書道』第七巻第五号（一九三八年〈昭和一三〉）で発表された「董華亭を語る」がある。この時、青山は二十六歳、西川の門に入る前である。この論を、青山は眼にしたかもしれないが、董其昌論を強く意識するのは、やはりこの書談会が最初であろう。

よって三四歳、六三歳、七一歳～七三歳と、董其昌の書作と書論に対するアプローチの節目が見えてくる。実は早い時期から晩

年まで、一貫した董其昌論への模索が、青山の中では行われていたのである。

董其昌理論を基軸に、青山は書に関する事項の検証を行っていった。より詳細に考えるに、青山は董其昌理論に触れる中で①書の技術面での検討、②書への内面的アプローチをそれぞれに試みたと推察できる。特に②の内面的アプローチ、いわゆる文人と言われる集団への検証が、真の書芸術に必要な意義を呈していると考えたのではなからうか。

そうした中で、青山著『江南遊』の構想（一九八〇年～一九八三年）が練られ、一九八三年九月に出版される。この著作はサブタイトルに「中国文人風土記」と記載され、文人に関する紹介的な書籍と、読者からは思われてしまうかもしれない。

「由来、江南は文化の淵叢といわれ、中国の文化を支える多くの人材を輩出した。（中略）…では何がこのように、この地区をして中国の重点地区にしまったのか。殊に私達にとって興味深い文墨関係の先賢の殆どが、この地に生を享けているという事実の秘密を解明するために…」<sup>4)</sup>

と青山は記載する。つまりこの著作は単なる文人紹介の内容ではない。より深い着眼点がそこにはあると考える。

青山は書芸術における技術以外の重要な面を、これらのことから、世の中に対して主張する。『江南遊』出版前後において、講演の回数が増えていく事実が、それを表している。

『江南遊』においては、可能な限り写真を掲載している。これは、各地域の実情を、読者が著者の意に流されずにありのままに見ることが出来るべく、しかも読者自身が青山の思考を検証出来るようにとの、青山の読者に対する配慮であろう。

この『江南遊』掲載の写真が、『書道研究』に使用されている同写真もあれば、掲載近辺の写真もある。

『書道研究』の表紙写真と〈表紙のことば〉は『江南遊』の延長上に位置しよう。写真は、青山の無言の主張、そして写真に対することばは『江南遊』に吐露された、いわゆる青山文人観への導入と考えられる。

### 三、『書道研究』〈表紙のことば〉についての検証

ここでは、『書道研究』誌の出版順に、〈表紙ことば〉の内容を検証する。（写真は、資料として末尾に付す。）

● 1987年6月（杭州市内のクリーク）

・「そこで培われた文墨の趣味も、長い歴史を背景に極めて洗練されたものが累積されている。」<sup>5)</sup>

この文章と類似する内容が、『江南遊』に見られる。

「…実は遠い南宋の頃のことだが、その当時士大夫の家々では、必ずと言っていいほどその邸の入口近くの壁面に、王羲之の蘭亭帖の石刻を嵌入していたと伝えられていた。くそう

いう習慣が今でもどこかに遺ってはいないか、あるいはどこかの文物店の片隅にその残骸でもころがついていないかと眼を皿のように<sup>⑥</sup>」

洗練されたものは時代の精査を受けている。慣習の見定めは、そのまま現代の杭州の様子を捉える手立てとなる。このような、あるフィルターを通しての事実確認作業が、青山の書芸術に向かう態度の特徴と言えるであろう。目前の単なる事物比較ではなく、そこにもう一つ、時間的・歴史的フィルターを通すことで、他とは違う深い洞察を試みている。

ここで使用されている写真は、『江南遊』と同じ場所であるが、季節が違う。このことから青山好みの場所であることが理解できる。類型作品を作らない青山であるが、その反面、非常な凝り性である一面が如実に現れている。この場所のスナップを最初に掲載した意義は、青山の書に対する視点を理解する上で非常に大きいと考える。

●1987年7月（無錫・寄暢園の景観）

・「江南地方には珍しい借景庭園で、はるか錫山の頂上にある名高い竜光塔の姿も園内で樹々や亭のたたずまいを映して静まり返る池の面に映じた様子を見るのが一番という<sup>⑦</sup>」

ここでの説明は、『江南遊』とほぼ同意文である。文意の通り、池面を広く取り、園林の映ずる様を表している。『江南遊』では

曇りのためか、竜光塔を直接写している。

●1987年8月（南京・莫愁湖の勝棋楼）

・「南京は、六朝以来の古い都城で、歴史的な遺構が郊外に多く現存している。今日の中心となっている地域は、明王朝を開いた太祖朱元璋の制定したもので<sup>⑧</sup>」

・「将棋を争ったと伝えられる楼閣があり、その故事を詠じた楹聯が掲げられている<sup>⑨</sup>」

この号では、表題のように勝棋楼の名前の由来を述べるが、その前に南京の情景を述べている。南京市内とその東郊や西郊のこゝと、玄武湖と莫愁湖のことを述べ、そして前述の楼閣の話へと繋がる。ここで南京市内の様子、東郊と西郊を述べるには理由がある。『江南遊』に以下が記されている。

「…この書（『江南遊』）は南の浙江より書き出してはいるものの、実は旅行の出发点は、上海は別として南京からであった。南京の双門楼賓館に旅装を解いたその日から、私の江南探訪は始められたと言ってもいいのである。その意味で南京は私にとって忘れられない町になっている<sup>⑩</sup>」

この青山の気持ちの表出が、〈表紙のことば〉であろう。青山が南京を初めて訪問するのは、一九八〇年の春である。この旅程には中国旅行社の王力氏と劉永祥氏が同行する。この旅行以来の王力氏との友情が、一九八七年に「隸書六言聯」（『青山杉雨書近

作Ⅱ』掲載)を生み出す。楹聯形式の作品は青山の最も得意とするところである。

〈表紙のことば〉の中では、特に明王朝を開いた太祖朱元璋を取上げ、古来の街の様子と朱元璋に纏わる故事を載せる。内容より、六朝時代から明時代に亘る南京一帯のことについて、青山が広い視野を持って検証するプロセスが看取出来るであろう。

また、青山担当の他号〈表紙のことば〉において、しばしば内容の一端に、南京に関する事が記載される。明王朝の歴史的発展を理解することも然りながら、六朝時代における社会状況、歴史的遺構や文化等に対して、青山の意識が非常に高いレベルであることが、これらの文より理解出来る。

この一九八七年八月十五日から九月十九日まで、前立腺癌治療のため、青山は入院をする。青山の生涯を通観すると、この事実、青山に深い「影」を落としたに違いない。

●1987年9月(常熟の水路)

- ・「常熟は蘇州の北方、揚子江の岸辺に近いところにある。町は決して大きくはないが、文化的には、歴史上重要な役割を果たした人々を多く出していることで知られる。」<sup>①</sup>
- ・「江南では紹興とともに、忘れ難い旅情を催させる、こよなくよい所である。」<sup>②</sup>

この号では、常熟の様子とそこに住まった文人について述べて

いる。『江南遊』においても同様で、より詳しい内容になっている。写真は『江南遊』と近似のものである。この「忘れ難い旅情」を想起させる一文が『江南遊』にある。

「私がかつて過ごした少年の頃の東京の江東地区の町はずれ、過ぎし日の浦安や葛西あたりの川沿いの家並を思い起こさせるもの」<sup>③</sup>

この内容から、青山が幼少期を回想していることが理解でき、ここに青山芸術の根幹が見受けられる。一見、前月の手術による一時的な心の弱さにも感じられるが、そうではない。青山はもともとロマンチストである。しかもどこかに自然と影を求める。ここが、青山の健康的ではない部分であり、故に、作品において「都会の憂鬱」と師西川寧に言わしめたところであろう。

このような状況下、青山は、この常熟の街並みや歴史的懐古を通して、自身の境遇を重ね合わせているのであろう。

●1987年10月(南京・梁代の蕭秀墓)

- ・「六朝時代の王侯墓が散在している。六朝芸術は、詩や書画については写本などでかなり伝承されているが、建造物はほとんど残っていない。そうした稀少な遺品のひとつ」<sup>④</sup>
- ・「王羲之にもつながる歴史の証とっていいものかも知れない。」<sup>⑤</sup>

この号の写真は、『江南遊』掲載の写真と左右対称のもので、

併せ見ることで、この景観が良く理解出来るであろう。

内容から、青山の王羲之像に対するアプローチの姿勢が垣間見られる。所謂、王羲之の書跡に依る検証ではなく、歴史的建造物や時代的慣習や文化によるアプローチである。同時代の書家と比較しても顕著である青山の視野の広さや好奇心旺盛な性格が、そのようにさせると思われる。

●1987年11月（揚州の水亭）

・「蘇州や紹興の水路は、街の中にある感じのところが多いのに、揚州のそれは、園林の中を縫うようにつくられているように見える。」<sup>16)</sup>

この写真は、『江南遊』と同じ写真である。『江南遊』でも、揚州の街並みと清の乾隆帝について述べている。中でも、張岱著『陶庵夢憶』の一文を挙げ、青山なりの揚州に対する歴史的事項の確認を行っている。この裏には、前年の一九八六年、第三〇回書道二十人展併催の揚州八怪展を主弁し、その記念講演を行っていることが関連するであろう。さらに『書道研究』の中で「冬の時期、木の葉が落ち尽くしてしまう頃になると、蕭條たる風情は、いつそう強く見る者に迫ってくる」という文がある。これは、自然と影を求める青山の思考過程をよく表す部分である。揚州八怪展記念講演でも「影」という語を使う。特に文人画についての説明において「文人らしい影」といい、この「影」に多くの説明的

要素を含ませてしまうのも、青山の特徴であろうか。揚州八怪の文人画の題材と明代以降の文人画のそれを明確に捉え、時代性をよりの確に捉えることを試みている。その流れの中で「胸中丘壑」（一九八七年・読売展）の作品が生まれたことは想像に難くない。

●1987年12月（紹興のクリーク）

・「魯迅の小説や文の世界がまざまざと眼前に広がる」<sup>17)</sup>

この写真は『江南遊』には掲載されず、ましてや近似の場所もない。歴史的に古い宋代の橋上からのこの写真は、紹興を知らない『書道研究』読者への配慮が見られる。『江南遊』においては、張岱の運命から、今日の紹興の町の転変を想像し、張岱や魯迅の人生から、江南の地を中心とした歴史とそれに絡む中国史について、青山が模索している様子が窺える。時代の中でゆつくりと成熟してきた紹興の風情から輩出された、また寓居した多くの文人へ思いを馳せていると考察できる。

これら文人の中でも、特に王羲之、徐渭、趙之謙を列挙できる。青山書学を貫く大きなキーワードは、「中世的思考」、「ルネッサンス」、「近代の思考」である（西嶋氏論）。この青山書学のキーワードに直接深い意義を持たせる人物が前述の三名である。つまり、王羲之は「中世的思考」の象徴であり、それを受けて北宋時代の書家たちにより「ルネッサンス」が興る。そして、董其昌の論に啓発され、書の近代精神が興り、その実践として明末清初に

おけるロマンチズム運動が始まる。徐渭も、董其昌理論を実践した一人である。その後、時代の推移とともに耽美主義（趙之謙に代表される）へと変遷する。

まさに、青山の書道史観における一種の歴史変遷と発展段階を端的かつ明解にするキーマンたちである。

●1988年1月（焦山上より長江を望む）

この写真は『江南遊』と同じものである。〈表紙のことば〉では、焦山からの眺めについて詳細に述べている。青山が、この焦山のある鎮江という街に注目した理由も、やはり文人がキーワードになっている。ここは、杭州から蘇州・無錫・常州・鎮江・揚州へと南北に通る大運河の主要街で、しかも長江とちょうど交わる位置に在るため、東西南北から多くの往来があり、著名人の来往も記録に残っているからである。『江南遊』には、鄭板橋のことについて言及している。揚州八怪という文人集団の、この周辺での文化的知名度について、青山は模索していたと考えられる。

●1988年2月（杭州・西泠印社）

この号では、南宋の都である杭州を述べ、西湖の孤山にある西泠印社に終始言及する。この文意は、この月の終わりから読売新聞社主催「西泠印社展」があるためで、青山がこの展覧会の企画構成そして顧問を務め、準備段階から並々ならぬ意気込みであった

たことが、周辺の話しからも窺える。

『江南遊』においても、西泠印社のことに頁を割いており、大変詳しい。この中で、青山は、芥川龍之介のことを出す。『江南遊記』における芥川の観察眼を通して、現在の杭州や西湖周辺の様子も、過去と比較する。芥川の観察眼は細部に及んでいる。芥川が江南の地を旅したのは一九二二年（大正一〇年）。明らかに、青山は江南の地に興味を持つ一環で、この『江南遊記』を一読したと考えられる。

『江南遊』の一説に「清朝以来のこの世界が、考証学や金石学の影響を強く受けて成立していたことに起因する。西泠印社の設立がこの機運に乗っていたとしても決して不思議なことではない」とある。この年、青山は国際現代書芸展に「乗運」を発表する。この作品の意味するところが、単なる運に乗るところだけではなく、機運に乗った西泠印社設立とその時代についての様子が込められたものであつただろうと推測する。

●1988年3月（蘇州の宝帯橋）

この号の写真は、『江南遊』と同じものである。宝帯橋のことと、この周辺について話を進めている。青山は、この橋について「…何故だかこの橋が好きで両三度訪れているが<sup>②</sup>」と述べており、この地を訪れながら、元時代やその当時ここを訪れたマルコポーロのことに思いを馳せている。この文章の裏には、青山の元



時代への関心が見て取れる。

この前年の一九八七年、読売新聞社と人民日報社は「蘭亭書会」を紹興蘭亭の地で大々的に開催した。一九八八年には、全書壇的に王羲之のことが改めて注目された感も否めない。

その中であつて、青山は、元時代において、王羲之の書法がどのように解釈され、どのような意味を持つて昇華されていったのか。その復古主義思想に注目していたと推測できる。その問いに対して、かたわら、青山は「…元代の章草好みは一種のモダニズムだったとも思える」と結論付けている。青山は、モダニズムの萌芽を元時代に認めている。この文は、当時の日本書道界に対する提言とも受取れる。章草書法が醸し出す峻険さにも、青山は関心を寄せている。

●一九八八年四月（太湖〈無錫・鼇頭渚〉）

この号の写真も『江南遊』と同じものである。無錫の様子と倪瓚とその画について述べている。また太湖の景色（鼇頭渚）と太湖沿岸の町とそこに集つた著名人に思いを馳せている。

その表出の一端であろうか、青山は一九八八年、多数の絵画を残す。この年は、異常と思われる程の絵画への凝り様である。その中には、中国文人画に倣う画風が幾つも観察でき、青山の絵画技法に対するアプローチが理解できる。しかし、重要なのは技術だけではない。書と画に対する作家の態度もより重要である。青

山は、「書画一致の意味するところを深刻に考えている」と述べた上で、書画一致の重要性をより高い次元で模索している。

『書道研究』では倪瓚について述べているが、青山は、既に一九八二年に「做元人の法」「做倪雲林畫法」という絵画を残している。

この絵画に至るのは、一九七六年の饒宗頤氏を知ることによる。一九八〇年、饒氏の京都大学出講を機に、東京にて饒宗頤教授個展を主弁し、展覧会が実現する。その後、饒氏は青山晩年まで相互の作品に影響し合う仲であつた。しかも「…先生没後、饒氏が青山家に寄せた挽詩には、自分と青山が同質、同傾向の作家と吐露されていた<sup>21)</sup>」ということから、青山自身も当時は元時代に興味があり、また饒氏の書画に対して「…これによって見られる教授の書画は、その関心の中心を特に元代に置かれているものの如くに思えた<sup>22)</sup>」と感想を述べていることから、文字通り二人は同質であつた。青山も饒氏と同じ絵画への視点が既に備わつていたと考察できる。元画が持つ峻険さを兼ね備えた一種のモダニズムへの関心である。

この資質は、単なる技術を通じたものだけでなく、文人に対する共通した認識により出来上がったものでもある。故に、青山は、做元人の絵画を残したのであろう。

●一九八八年五月（松江のクリーク）

この写真は、『江南遊』と同じで「松江クリークの橋」という題で掲載されているものと同じである。

この号では、松江の鱸魚について述べる。松江出身の者が「忘れ難い故郷の味」として帰郷してまでも食する名高い松江の鱸魚のことは、単なる美食というだけでなく、青山の郷愁を何かしら誘うものがあつたと考える。『江南遊』に「松江クリークの橋」と併載の写真「松江の小路」から、そのことが強く感じられる。

ここでは松江のことを述べ、董其昌、華亭派について述べている。『書道研究』では紙面上の関係で多くの説明は無いが、『江南遊』での松江の説明は的確であり、松江の街並みや歴史・文化をより明確に読者へ想像させる。董其昌を頭領とした華亭派について述べ、後世に続く人への、影響の重要性を解き、青山自らもその影響下にあり、その模索の最中であることが暗示される。

● 1988年6月（残照の中の蕭積墓）

『江南遊』では、「棲霞山地区の梁墓」という題で、近似の写真が多く掲載されている。

『書道研究』で注目すべきは、六朝時代の蕭積墓の保護に対する、青山の示唆であろう。これは単に、時代の古い石刻に対する思いだけではないと考える。これまでの江蘇学術調査団としての四回にわたる南方地区の調査、福建沿海の史跡を探る閩南古跡に関する調査を踏まえての、広い視野に依る提言であることは間違

いない。青山自身の、書に対する考えがこれ程までに広範囲に及んでいることは、同時代の書家達にとっても想像し難いものではなかつただろうか。故に、青山は時代のリーダーとなり得たと推察する。

しかしながら、もうひとつ、この棲霞山地区の六朝の陵墓、すなわち齊梁の遺跡に、青山が興味を示す理由があつたと考える。勿論、歴史を通じての王羲之という人物又はその書法の解明の一端とも考えられるが、最大の理由は師西川寧の論じた『六朝の書道』の検証ではなからうか。装飾的な神道石柱や墓の靈獸類などの石刻資料からも何らかのヒントを得ようとし、また、梁代の書論から当時の書の様子を推察し、西川論をフィルターとして、自己の六朝書道史の確立を目指したと考えられる。

更に一九八九年五月『書道研究』において、棲霞山地区梁墓の、特に蕭景墓に関する補足的説明を行っている。

● 1988年7月（泉州の洛陽橋）

● 1988年8月（紹興への水路）

この二カ月分の写真は、『江南遊』には掲載されていない。青山にとっては、『江南遊』の系譜とは少し違う、書についての新しい視点を示唆する写真である。

まず「泉州の洛陽橋」は、青山の福建への興味が窺える。宋時代に造られた閩の三橋について述べ、洛陽橋（創建当時は萬安

橋)について説明を行っている。その中で、萬安橋の建造に関わり泉州の太守であった蔡襄にも言及し、蔡襄書「萬安橋碑」(『書道研究』に写真掲載)についても解説する。これはこの年の五月末に、一週間程、閩南を視察調査したことに依る。福州、莆田、泉州、廈門がその訪問地で、青山は、当地での調査課題を幾つも掲げていたが、文革後の現地状態の悪さや天候による理由で、いくつかの課題が調査不可能であったことが記されている。青山にとって、心残りのある旅程となつたに違いないが、最大目標(青山談)の萬安橋と泉州については、大変詳しい解説を行っている。また泉州の街中の開元寺とそこに掛けられた張瑞図の額や聯の多さも述べ、さらに李卓吾の故宅を訪れ、故宅付近の様子も詳細に述べている。愛読書といわれる島田虔次著『中国における近代思想の挫折』の中の、李卓吾の思想に対する検証とそれに関わる時代性についての調査であることは言うまでもない。中国明末時代をよりの確に捉えようとしている。これは『明清書道図説』の編纂に大いに影響を与えたが、再度、更に何らかの実証調査を考え、この地を訪れたであろう。それは、李卓吾の思想形態の源泉を推定する課題であったのかもしれない。この調査で、青山は李卓吾がイスラム教徒であったことを知る。

しかしながら、青山がこの閩の地に注目した真意は他にもあるうか。推察するに、港町が多く、しかも福州や泉州は周知の通り、昔より貿易港であり、その南方との貿易で日本へ何がもたらされ

たのか、ということも青山の関心事項ではなかったのか。

李卓吾について調査する事は、明末時代の近代への思考の萌芽と、前述した徐渭の書芸術における書道史的意義を明確にすることもである。が、更に当時の日本(江戸時代)の近代化についても合わせて考察する事が可能になる。

もし中国南方地域の影響が強ければ、それらが即ち江戸時代に隆盛した唐様書形成の一基盤となり、日本国内における真の中国書法の萌芽についても想定出来るのではないだろうか。

また、江戸時代末期以来の日本書道史の変遷を考える上で、青山は、楊守敬の来日だけが日本近代書道の変化に関与しているのではなく、既にこの閩南地域との貿易の中で何らかの影響は受けていたと推測していたのではなからうか。張瑞図や黄檗宗、李卓吾に関する調査が、それに当たると考える。また、一九八九年六月の『書道研究』(晋江の古い街)からも、より深い泉州への理解が窺える。閩南地域や張瑞図に関する調査の片鱗も理解出来るであろう。

次に「紹興への水路」は、『江南遊』に同写真は掲載されていないが、「紹興への路」と題し、クリークの写真が七枚掲載されている。青山の、最も愛する風趣に富んだ光景である。『書道研究』の写真は、紹興の蘭亭を暗示するかのようになり、画面にガチョウの姿を写す。しかもこの一九八八年八月号において、『書道研究』は「王羲之の人と書」という特集を組んでいる。この杭州か

ら紹興への水路の写真を選ぶことは、青山の江南への思いと、文人というものを育む自然や文化に対する憧憬が強く感じられる。杭州から掲載がスタートし、江南の地（滬寧杭地区）を巡り、最後は紹興にて、一通りの写真連載は終わる。書道史の観点からすると、やはり六朝時代における王羲之の影響に青山自身も敬服していると同時に、王羲之に関連する諸問題を暗に提示している事も推察出来るであろう。しかしながら、六朝時代の複雑な社会状況下でも、洗練された高い文化レベルを維持し、そして発展させた江南の地の人々に対する敬意も感じられる。強いては、人々に支えられたこの高い文化レベルが、青山が終世意識する文人という礎を担うものであったと考える。

#### 四、おわりに

『書道研究』の連載が始まった一九八七年六月から一九八八年八月の間は、前述のように、青山にとつて大きな出来事があった。その中でも特筆すべき青山自身における最大の出来事は、一九八七年九月の前立腺癌治療のための入院である。九月十九日に退院をするが、体調はあまり良好ではなかったと思われる。その後、日展で「澹如」を発表する。しかし、退院後の青山自身の精神状態は、決して澹如ではなかったと推測する。青山自身も、この作に関しては元気のなき、自分らしきの欠如を指摘しているが、自身の生に関する一抹の不安も隠せなかったためであろう。故に

術後の体力的な衰えもあろうが、この「澹如」を制作しながら、不安な心情を自制していた面もあるのではないか。翌年は、「畫沙」（読売展）、「鑄字」（日展）など、書家青山の代表作が次々と発表される。そういう意味からも、「澹如」は、青山書芸術第二期黄金時代の最終的な完成を手助けした、大変意味のある作品であると提言したい。この作品の線質と雰囲気は、それまでの青山の質とは明らかに違う。線にある種の重さが加わる。「停滞」といえるものが、その奥に生じている感がある。そして、自身の生に否が応でも向き合わなければならない状況から「苦渋」が生まれ、この作品の不可思議な雰囲気は完成したと考える。この作品無しに、次のステップへの昇華は考えられない。

体調が悪いながらも、青山はこの二年間のうちに、日本書道界にとつての大事業を成し遂げる。前述の「蘭亭書会」「西泠印社展」がそれである。しかしながら、大事業の裏には、それに匹敵する系譜的事業にも主弁や参加、監修を行っている。「吳昌碩周辺」の文人書画展（謙慎書道会主催）、「日中書法交流展・香港展」（国際交流基金・全日本書美術振興会共催）、「中国当代書法家請来（中国当代墨宝展）」（成田山新勝寺開基1050年記念）である。これだけの事業を手掛けるには強靱な行動力と、日中問わず、関係者との具体的な企画の遂行が必要であることは理解できる。では、このような企画を行うきっかけになった事は何か。やはり、日本書道界の進むべき将来の模索に因るのではないか。

「…教養主義か表現主義かの相克、新教養主義の可能性、技術至上主義への反省、書道教育についてなどなど、掘り下げられた分析が展開されるこのインタビュアーが催されてから、すでに二十年が過ぎていますが、我々はここに採り上げられた諸テーマにつき、充分に対応し得ていないことに気づかされる」(西嶋慎一氏「解説」)

この一文が、そのことを的確に論じていると思われる。

「西冷印社展」が開催される前年の四月、「蘭亭書会」が行われるが、その書会前日に西冷印社を訪問し、展覧会展展予定の作品を、青山自らが厳選する。この時の様子は、『青山杉雨文集第四巻』に詳しい。青山の粘り強い交渉のことが記録されている。ここまで青山が尽力した理由は、前述同様、青山自身が考える書世界の定着と啓蒙を、自己の確信の基に行っている結果であろう。

このような活動の結果として、この年、青山は文化功労者に顕彰される。これにより一層、書道界に対する責任を感じたのではないか。その一端として、一九八八年秋は、精力的に古典臨書(全臨)を行う。青山が、更に新たな境地を目指していたことは確かである。この時期は、翌年の年明け早々開催の朝日二十人展の仕事が控えており多忙である。その中で、古典の全臨は超人的としか言いようがない。それだけ、青山の書に対する思いの強さが感じられるであろう。臨書古典には、楚帛書・毛公鼎・散氏盤・石鼓文・燈清堂帖等を選択する。この選択にも、青山の書の

技法への拘りが見られ、しかも書かれた臨書作品は、単なる古典その物の真似ではない。その先の時代に展開する技法(書風)を青山流として加味した仕上がりになっている。

このような忙殺の時期での『書道研究』への執筆は、多くの深い意味合いを読者に提言すると同時に、青山にとっては、ある種の心の抛り所となっていたのではないか。

この小論は(表紙のことば)を中心に考察を試みた。青山が、自身の生の中から作品の題材を選択し、「…青山は、常に自己の作品と、それを造り出すに至った理念を説明した。己が立つ場はつきりさせる」という西嶋氏の論考のように、(表紙のことば)も、全てが青山の生活と繋がっており、そこから作品制作に至る様子が看取出来る。

青山作品の評に「一作一面貌」という語が冠されているのを書籍等でよく見かける。前述の検証より、青山作品は、表面的、作爲的な「一作一面貌」ではないということが理解出来る。必然的な「一作一面貌」である。常に自身の生と一緒に動いているのである。作爲的であれば、必ずやパターン化してしまう。現代の書家においては、作爲的「一作一面貌」が多く、解釈を取違えている作家も少なくないと考える。青山の「一作一面貌」の真意についても、この(表紙のことば)の解釈から明白であろう。

青山は生涯を通じ、文人というものの存在を、身を以って我々に示唆していたのだと思われてならない。

注

- (1) 『青山杉雨作品Ⅰ』、二玄社、一九九四年二月、二五〇～二五九頁  
 『青山杉雨作品Ⅱ』、二玄社、一九九四年二月、二四五～二四九頁
- (2) 青山杉雨『青山杉雨文集第四卷』、岳陽舎、二〇〇七年五月、九六～九八頁
- (3) 西川寧『西川寧著作集第二卷』、二玄社、一九九一年七月、四六五～五四四頁
- (4) 青山杉雨『江南遊』、二玄社、一九八三年九月、自序
- (5) 青山杉雨「表紙のことば」『書道研究』、美術新聞社、一九八七年六月、一二頁
- (6) (4) と同載。五頁
- (7) (5) と同誌。一九八七年七月、一九頁
- (8) (5) と同誌。一九八七年八月、一九頁
- (9) (8) と同載。
- (10) (4) と同載。一八九頁
- (11) (5) と同誌。一九八七年九月、一九頁
- (12) (11) と同載。
- (13) (4) と同載。一三三～一三四頁
- (14) (5) と同誌。一九八七年一〇月、一九頁
- (15) (14) と同載。



(杭州市内のクリーク)



(無錫・寄暢園の景観)



(南京・莫愁湖の勝棋楼)

- (16) (5) と同誌。一九八七年二月、一九頁
- (17) (16) と同載。
- (18) (5) と同誌。一九八七年二月、一九頁
- (19) (4) と同載。一四頁
- (20) (4) と同載。七七頁
- (21) 青山杉雨『青山杉雨文集第二卷』、岳陽舎、二〇〇六年五月、二二三頁
- (22) (21) と同載。二〇〇頁
- (23) 青山杉雨『青山杉雨文集第五卷』、岳陽舎、二〇〇七年一月、三七四頁
- (24) 西嶋慎一「晉人の風流を求めて―赤羽雲庭私論―」『書論』、書論研究会、二〇一二年三月、七四頁



(蘇州の宝帯橋)



(紹興のクリーク)



(常熱の水路)



(太湖(無錫・鼇頭渚))



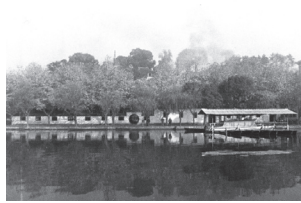
(焦山より長江を望む)



(南京・梁代の蕭秀墓)



(松江のクリーク)



(杭州・西泠印社)



(揚州の水亭)



(晋江の古い街)



(太湖の西洞庭山)



(残照の中の蕭積墓)



(長江を下る船団)



(泉州の洛陽橋)



(六朝・蕭景墓の石獸)



(紹興への水路)

**Aoyama Sanu's Conception of the Art of  
Calligraphy  
— A Study of “SYODOU KENKYU” —**

Masahiko KOKI

Department of Education and Psychology, Faculty of

Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi

807-8586, Japan

No English abstract